

生ごみ減量化の新兵器

小林地区公民館EM実践講座

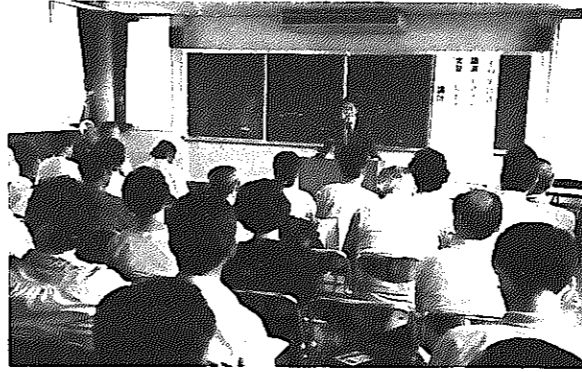
夏場になると臭くていやな生ごみ。「家庭で出る生ごみ、何とかならないかしら」と考えている人も多いはず。そんな生ごみを微生物を使ってたい肥にし、リサイクルしようというEM実践講座が七月二日、小林地区公民館で開かれました。

EM菌とは、生ごみを乳酸発酵させる約八十種の微生物の集まり。これを米ぬか、もみがらなどに混ぜて発酵させたボカシを、生ごみにかけて密閉しておくといふ肥がでかあります。コンポストに比べると、悪臭

がなくて虫もわきにくいと、今、注目の微生物作用です。

講座には主婦、農業者ら約四十人が参加。中には三条市、新潟市などから来た人も。「土に入れる時期は、「混ぜ方のこっぴ」などの質問が矢継ぎ早に飛び出し、関心の高さをうかがわせていました。

この日、ボカシ作りが行われ、できあがるのは二週間後。「そのときはもう一度集まって学習会を」と意欲的な受講生の皆さん。ごみの減量化活動が少しずつ始まっています。



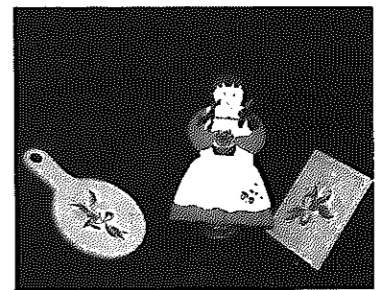
ボカシ作り

完成、手作りのインテリア

根岸地区公民館 木工クラフト教室



六月十四日、根岸地域生活センターで木工クラフト教室が開かれました。同教室は、五月下旬から四回に



▲花置き腰掛け人形と鍋敷き

わたって同地区公民館が主催した。同地区の新田由美子さん、清田裕子さんを講師に木工クラフトの花置き腰掛け人形とトルベイントの鍋敷きを作成しました。

「大人になってから絵を描いたり、塗ったりするなんてめったにない機会。とても楽しいです」と楽しんで作業をする参加者。最終日のこの日は、出来上がった作品の品評会が行われました。「初めてにしては良くできています。みんな上手で安心しました。一人一人表情が違っていました。できたと思います」と二人の講師が講師。参加者たちは出来上がった作品に目を細めていました。

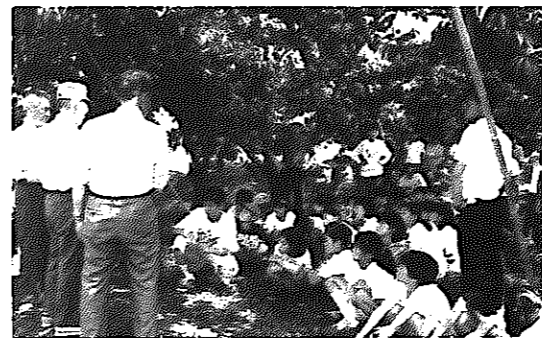
桃畑で話してみようか

茨曾根地区公民館ふるさとハイキング

六月二十八日、「ふるさとハイキング教室」が茨曾根地区で行われました。これは、地域のお年寄りや茨曾根小学校の協力を得て、同地区公民館が毎年行っているもの。同小学校の五・六年生が自転車でお年寄りたちから歴史や言い伝えなどを学びました。

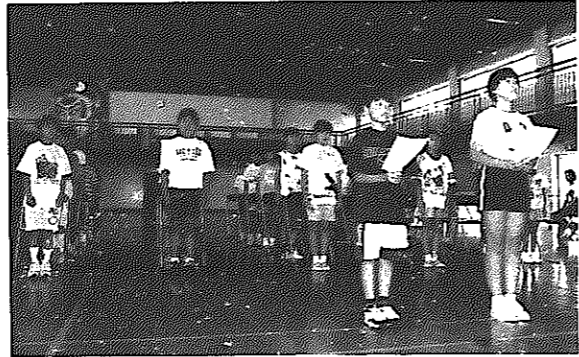
昔話や郷土史研究のさかな同地区だけに、お年寄りたちの説明も熱が入ります。自分の乗った籠をほかの大名の領地に置いて領地を取った話や西郷隆盛が訪ねてきたという旧家での話などに子供たちは熱心に耳を傾けていました。

夏の思い出を乗せた自転車の列が桃畑の中に続きます。



少年の胸に防火の誓い

大通少年消防クラブ



「火の用心に努め、互いに助け合います！」一元気に誓いの言葉を述べる大通小学校の五年生二十三人。七月十日、同校で行われた少年消防クラブの結団式です。

少年消防クラブは低年齢から防火の意識を高めてもらおうと白根地区消防本部が任命を行っているもので、管内では小林小学校に続いて二校目。防火や救

護に関する知識や技術を身に付けることが目的です。

消防本部の後藤次長は「火は毎日使うもの。ちよつとした不注意で尊い生命、財産が焼けてしまいます。これからの研究、体験で知り得たものを防火のために生かしてください」と激励。一人ひとりにクラブ員証が手渡され、子供たちの顔には決意がみなぎっていました。

ヒロシマの体験、生々しく

北中学校被爆体験談を聞く会

七月十四日、北中学校で原爆被爆者の体験談を聞く会が行われ、生徒、父母らが戦争の悲惨な体験に耳を傾けました。これは県教育委員会指定の地域ぐるみの道徳教育「心の教育フォーラム」の一環として行われたものです。

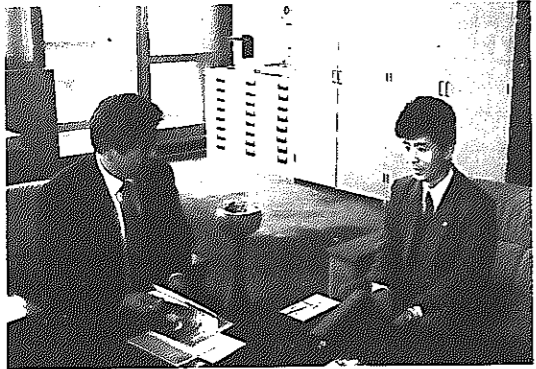
この日招かれたのは、十七歳のとき爆心地近くで被爆したという山内悦子さん。「被爆の瞬間は光に包まれた感じ。町には体全体にびっしりガラスの破片が刺さった人、背中にもうじ虫がわいている人がたくさん転がっていて」と

被爆の悲惨さを語り、「今、核保有国が持っている核爆弾がさく裂したら、天に向かってつばを吐くようなもの。地球全体がだめになるでしょう」とも。二十一世紀を担う皆さんには平和な世界をつくらなければならない」と生徒たちに痛切に訴えかけました。

同校では今年、広島平和祈念式典に生徒二人を派遣する予定。参加する速藤肇さんは「私たちは戦争のことを何も知らない。これから何をすべきか、体で感じてほしい」と強く語りました。

夢を現、ザンビアへ

青年海外協力隊 島倉一雄さん



世界五十四カ国で約二千人の隊員が活躍している青年海外協力隊。県内からは、四人が平成七年度第一隊の隊員として世界各国へ派遣されます。その中の一人として、アフリカのザンビアへ派遣される島倉一雄さん(真木新田)が、六月二十八日、市役所を訪問。市長から激励を受けました。

島倉さんは、四月から福島県にある訓練所で、語学を中心に約三カ月間の訓練を終え、七月十一日に派遣国へ出発します。派遣されるザンビアは、中央ア

フリカ南部に位置する国。自動車整備士、自動車電装整備士の資格を持つ島倉さんは、首都ルサカから約百五十キロメートル離れたカプエ職業訓練所という所で、自動車整備について教えることになっています。

協力隊員になることは、短大時代からの夢だったという島倉さん。「教えるだけでなく、人間的な面では、こちらが勉強になることも多いのでは」と話します。「南半球に位置し、気候も食べ物も全く違う土地へ行くので、慣れるまでは大変だと思いますが、頑張っていきたい。帰国後はボランティア関係の仕事ができれば」と意欲を燃やしていました。

